

ファーム伊達家からのおたより

ようこそ畠へ

2008年9月30日(火),10月2日(木)VOL.16

愛子が会員の方からこんな話を聞いてきました。

「これ、クレームではないんだけど、枝豆に虫が入っていたんだよね。それで思ったんだけど、この枝豆を虫も食べるし、虫に食べられていないところは私が食べる。これって、虫と共に存しているってことなんだな、と思ったんだ。」

まず、虫が入っていたことはお詫びしたいと思います。収穫、袋詰めの時に虫や虫くいのひどいものには気をつけてはいるのですが、完璧に取り去ることは難しいのが実情です。虫が苦手な方もいると思いますので、お気づきの時は遠慮なくお知らせください。

この話を聞いて、僕達が取り組む無肥料無農薬の自然栽培で虫・病気・草をどう捉えるかを書いてみようと思いました。

自然栽培では、人間が投入した農薬や肥料（これを「肥毒（ひどく）」と呼んでいます。）が虫・病気・草の原因となると考えます。化学肥料や農薬は自然界にとっては異物であり、異物を投入し、人間が自然界のバランスを崩した時、「異物」を除去するための自然界からの使者として、虫や病気や草が発生するのであり、虫・病気・草は土をきれいにする役割を果たしている、と捉えます。つまり、虫・病気・草は悪者ではないのです。

過去に投入した肥料や農薬がなくなれば、虫・病気・草はほとんど発生しなくなる、というのが自然栽培の考え方で、実際、千葉県で自然栽培でニンジンを作っているTさんのニンジン畠では、自然栽培を続けていくうちにニンジンが良く育つようになる一方、虫も病気もなくなり、草はほとんど生えなくなったと言います。有機栽培の苦労の代名詞とも言える「草取り」は自然栽培では過渡的の現象で、いずれはほとんどなくなる作業だとTさんは言います。

過去の肥料や農薬を積極的に取り除くためには、豆類やイネ科の作物を栽培することが推奨されています。これを全ての畑で一度にすると、他の作物が作れなくなるので、昨年から、少しづつ区画を決めて、大豆、黒豆、青大豆、いんげんなど豆類を植え、続いて今年からはイネ科ではありませんが根を深く張る「亜麻」を植えて過去の肥料や農薬を取り除く試みをしています。

僕達が豊滝で野菜作りを始めて4シーズン、農薬や肥料は一切使用していません。しかし、この畑が開墾されて以来、農薬や肥料が使われてきたことは間違いない、それがなくなるまで虫・病気・草が発生したり、そのために収穫量が減ることは避けられません。僕達はそのリスクを背負っていかざるを得ません。

いつの日か、虫・病気・草がなくなること目指して、地道に肥毒を取り除くことに取り組みつつ、それまでの間、虫・病気・草と共生していくことが必要になります。押し付けるつもりはないのですが、その時間を共有してもらえたならありがたいな、と思っています。